

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『会計の再生～21世紀の投資家・経営者のための対話革命』

伊藤邦雄 監訳 | 中央経済社、2018、311pp.

本書は、ニューヨーク大学スターンビジネススクールの会計およびファイナンス分野の教授であるBaruch Levとバッフアロー大学Feng Gu准教授による、”The End of Accounting: and the Path Forward for Investors and Managers, 2016”の邦訳版である。

第一部では、財務情報や財務報告の価値関連性や有用性が失われていることを、膨大なデータの分析により裏付けている。第二部では、近年の無形資産投資の増大や公正価値評価重視の会計基準が財務報告の有用性喪失の原因となっていることを明らかにしている。第三部と第四部では、新たな業績報告の枠組みとして「戦略的資源・帰結報告書」を位置づけ、盛り込むべき情報を主要な産業別に特定し、財務報告制度の変革に向けた示唆を与えている。

本書は、「レレバンスロスト」ともいえる財務報告の実態と改革の方向性を明らかにするものであり、企業の統合報告書やESG投資などの無形資産やサステナビリティ重視の情報開示が台頭するなかで、今後の制度設計に重要な影響を与えることが予想される。会計分野はもちろん、コーポレート・ファイナンスを学ぶ人、証券市場に関わる全ての人々の必読書、そんな画期的な一冊となっている。

評／『彦根論叢』編集委員／宮西賢次

『統計は力なり～エルンスト・エンゲルの希望の学』

太田和宏 著 | 春風社、2019、448pp.

エンゲル係数は知っていても「エンゲル」がなんなのか、人名であろうことは想像できてその人がどういう人かということを知っている人は少ないのではないだろうか。

エルンスト・エンゲルはドイツの統計学者、経済学者でありプロイセン王国の統計局長を務めた人物である。一般的に知られていることはこれくらいであり、本書によるとそれは故国のドイツでも同じらしい。本書で述べられていることはエンゲルの人柄・人生であり、印象深いエピソードの一つに宰相ビスマルクとの対立がある。統計資料を入念に分析し死刑制度が犯罪の抑止力たり得ないというエンゲルの主張は、死刑制度維持の立場を取るビスマルクを激怒させた。エンゲルはこのことで釈明文を提出することになるのだが、そこに次のような一節が書かれている。

「この真実(結論、評者注)が世間の通念に反しているかどうかということについて統計はいかなる考慮も払う必要がない。統計はその研究においていかなる結論にもひるんではならない。そして官庁統計は実に、それが政府の制度ではなく国家の制度だということ肝に銘じてなければならない」

昨今の官庁統計不正問題に政権への忖度があったかどうかという話とは別に、統計を扱うものにはこの一節を忘れないでもらいたい。

評／『彦根論叢』編集委員／大濱巖

